The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	食の存在論ノート
Author(s)	中岡, 成文
Citation	臨床哲学. 2002, 4, p. 96-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12211
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

食の存在論ノート

中岡成文

Ⅰ　「養う」というケアのあり方――貝原益軒

貝原益軒において食というテーマを考察しようとすると、「養生」ないし「養う」という広い観点をとることになる。人はさまざまな面で養われねばならない。そして、養分は外から来るとは限らない。このような益軒の思想の背景には、朱子学などを支配した「気」の哲学がある。気の存在論に基づくさまざまな推論のパターンは、後にも見るように、現代科学の知見に親しんだ私たちの目からは、奇異に映る場合も少なくないが、食や「栄養」、さらにはケアのあり方を捉えなおす助けにはなると思われる。以下では、貝原益軒の『養生訓』（伊藤友信訳、講談社学術文庫 1982 年に基づく。以下本節の丸カッコの中の数字は同書の参照ページ）から学べる点を取り出してみたい。

1　養生は内外の調和

益軒は「元気を養う」（34）という言い方をする。飲食などの外物の助けによりそれは可能になるが、食べ過ぎると、「生まれつきの内なる元気」が「外物の養分（気）に負けて病いになる」とも言われる。「ひとは、心の内に楽しみを求めて、飲食などの外的な養分をほどほどにすべきである。外物の養分にたよりすぎると内なる元気をそこなう結果になる」（35）と益軒は警告する。

「外物の助け」、つまり現代の私たちのいう栄養をそれだけ切り離して考えるのではなく、身体の内と外との相互作用のなかでトータルに捉える。この益軒の視点は、次のような箇所にも示されている。「ひとの身体は、元気をもとにしている。穀物の養分によって元気は生成しつづける。穀物や肉類をもって元気を助けなければならない。とはいうもののそれらを食べすぎて元気をそこなってはならない。元気が穀肉に克てば命は長いし、穀肉が元気に克つと短命になる」（97）。「穀肉が元気に克つと短命になる」という最後の文は、養分の取りすぎ、摂食の仕方のゆがみなど、現代の食生活の問題点を指摘しているようにも思える。じっさい、厳しい食生活を送ってきた人の身体はそれなりの「工夫」をして自己維持しているので、ふつうの食生活（バランスのとれた栄養状態）に入るとかえって太ってしまうことがあるという（三好春樹『元気の出る介護術』より）。

元気という言葉以外に、「心気を養う」（35）という言い方も『養生訓』には見られる。

「心気を養う」のが「養生の術（方法）の第一歩」（同）であるが、それはいわば足し算よりは引き算に基づく。つまり、積極的に何かを追い求め、積み重ねるというよりも、心を穏やかにし、憂いや心配をなくすこと、「心を苦しめず、気を痛めない」ことが、「心気を養う大切な方法」だというのである。また、「もし飲食や色欲を慎まないならば、毎日栄養剤などの補薬をのんでも、朝夕に栄養を補っても何の役にもたたない」（以上同）とも述べられている。要するに、守りといえば守りの姿勢であるが、気を消耗させるのではなく、むしろ養うこと、心を静かにし、「気を和かにして荒くせず」（68）にいることが眼目とされているのである。現代に目立つアクティヴな健康法とは対照的といえよう。

益軒はそのほかにも、「徳を養う」（65）とか、「思いを少なくして神（心）を養い」とか 、またこれは明代の医書に出てくる言葉のようであるが、味の濃いものを食べないで血気を養う、ないし飲食を節制して胃気を養う（以上80）とか、注目に値する「養い」に言及しているが、私がそのなかで最も教えられるのは、「志を養う」（125）という表現である。これはとくに親に接するときの心得とされる。子たる者は、親の「口腹の養い（栄養）」に気を配るだけではなく、親の心を楽しませて、「志を養う」（234）べきだという。それはまた病人へのケアの態度にも通じるのであり、病人の望みをかなえてやることにより、その志を養うというのであるが、これについては次項に譲ることとする。

2　ケアの観点

ケア論とも読める益軒のテクストは、自己ケアに関するそれ（「畏れ」をキーワードとする）と、他者へのケア（「養い」をキーワードとする）とに分けられる。

まず自己ケアについて見る。「養生は畏れの一字」（37）であると益軒はいう。「畏れるということは、身を守る心の法である。すべてに注意して［原文では「心を小にして」−−引用者注］気ままにしないで、過失のないようにし、たえず天道を畏れ敬まい、慎んでしたがい、人間の欲望を畏れ慎んで我慢すること」（同）が肝心である。また、「養生の道においては、勇ましいのはだめで、畏れ慎み、いつも小さな橋を［原文では「ちいさき一はしを」−−引用者注］渡っているように用心すること」（55）が勧められる。畏れるのは、恐怖することを意味しない。「畏れるということは大事にすることをいう」（同）のであり、とくに老人はこれを銘記する必要がある。

益軒は、「内敵には勇、外敵には畏れ」（42f）ともいう。つまり、体の中の敵（飲食・好色・睡眠などの欲や怒り、悲しみ、憂いなど）に勝つには心を強くして、忍耐すること、我慢することが大切であるのに対して、外敵（風・寒・暑・湿）に勝つには「それを畏れて早く防ぐこと」、このときばかりは忍耐しないことが大切だと力説している。

次に、他者のケアについて。先述の「志を養う」べきことが指摘される。身体ではなく、むしろ「志を養う」（125）こと。これは病人に接するときに重要な心得である。「病

人がひどく欲する食物がある。食べて害になるものや、冷水などは、どんなに欲しても与えてはならない。が、病人が強く食べたがるものを、のどに入れて飲みこまないで、口の中で味わわせてその願望を満たしてやることも、病人の志をききいれての養生の一つの方法である」。今の引用の最後に、「病人の志をききいれての養生の一つの方法である」と現代語訳してあった文は、原文では「志を養う養生の一術也」とある。「病人の志をききいれ」るのとは、少し違う。病人が強く欲しがる食べ物を、それが消化できないから、あるいは飲み込んだら健康を損ねるからといって拒否し、落胆させるのではなく、せめて口の中でいっときもぐもぐと味を楽しませて、ともかくも望みをかなえて、気持ちを前向きにしてあげる。それが病人の「志を養う」ことである。心をサポートし、闘病の助けになるのである。じっさい、今のホスピスでも、もはや食べ物を飲み込むことができなくなった末期の患者さんに、好物を口の中で噛み、その味わいを楽しむよう勧めることもあると聞いた。益軒はまた、先述したように、親の心を楽しませて、「志を養う」(234) という子の務めにも言及している。

3　攻撃的医療の否定

益軒の気と養生の哲学は、医療に関しても、足し算よりも引き算、積極的・攻撃的であるよりもしっかりと足下を固める方向をよしとする。「薬はことごとく気を偏らせるものである」(39) と彼は述べる。治療よりも、予防を勧めていると言い換えてもよい。薬・鍼灸を使わざるを得なくなる前に、飲食・色欲を慎み、規則正しく寝起きして養生すれば、病にかからずにすむ (38)。予防を主とするやり方は、治世にたとえながら説かれる。国を治めるのに徳をもってすれば（＝養生すれば）人々はおのずから心服して乱は起こらない（＝病にならない）。ところが国を治めるのに徳を用いないで（＝養生しないで）力をもって政治をする（＝薬・鍼灸に頼る）なら、人々は恨みそむいて乱を起こし、かりに百戦百勝しても尊敬されない（39f）というのである。

Ⅱ　ヘーゲルの「食」論

ここでは、ヘーゲルの主著の一つである『精神現象学』(1807 年）の「自己意識」の章の冒頭に出てくる生命論、さらには「食」論を検討したい（以下では、樫山欽四郎訳に主として依拠するが、テクストの分量が少ないせいもあり、引用注は省略する)。これにより、前節で見た貝原益軒の「気」の哲学、ひいては東洋的全体観（人間と宇宙とが一体）から一定の距離をとることができ、また、食の「生命的（生き物的)」意味、つまり「世界から自分を闘いとる」という機能に注目することができる。

さて、上述のヘーゲルのテクストであるが、これは生命体としての人間が「自己意識」を確立するのに先行する、プリミティヴな段階を描き出している。個々の人間も他の生

物も、生命界の一部である。個体は、生命を持つ間は、他の個体から区別される「区別項」であり、「形態」である。しかし、死んでしまえば生命の流れ全体の中に呑み込まれて、形を失ってしまう。したがって、一方には全体としての生命の流れがあり、他方では個々の生命体があり、後者は生まれることにより前者の中で一定の「区別項」となり、死ぬことにより前者の中に完全に吸収され、「廃棄」されてしまう。

「分裂の廃棄は他者によって起こる。しかし廃棄は自立性そのものにも在る」とヘーゲルは述べる。つまり、個体の死は他の個体によって引き起こされるが、そもそも個体として生まれ、存在しているということがすでに、己の内に「死」を胚胎しているのである。生命の非情な流動性は、個体の存立を支える一方でそれを圧迫し、ついにはその自立性を解体させ、呑み込んでしまう。個体が存立するということは、この非情な解体作用に対抗し、それを「抑圧」して、自分の「区別」性を守るということである。

人間は生命界の一部でありながら、自己保存のために他の生命体を「食べる」。食べる行為により、人間個体は「自分が自分と一つ」だという「自己感情」を形成すると、ヘーゲルは述べる。かくして、他の生命体を食べてしまうことにより、つかの間の充足感が生じるが、食べてしまうと、その対象は当然ながら無くなってしまう。そうすると、せっかく「自己感情」を与えてくれた当のものがなくなってしまうわけである。ということは、人間が向かうその対象が食べ物のような受動的なものではなくて、もっと手応えのあるもの、結局は別の人間でないと、永続的な「自己感情」は得られないことになる。ここに、「食」の限界が示唆されているのかもしれない。

見方を変えるとこうも言えるだろう。そもそも食べることはひとりだけでは実現しない。必ずといっていいほど、他の人、社会の仕組みが介在しなければならない。コンビニで何か買って食べるためにも、流通経路などの助けが必要になる。食をめぐる問題を考えるとき、この社会性を忘れては、十分なアプローチができないであろう。

III　環境と食べること——今西錦司『生物の世界』

今西錦司は進化について独自の見解を発表した学者として知られているが、ここでは彼の『生物の世界』（今西錦司全集第一巻、講談社 1974 年。以下本節の丸カッコの中の数字は同書の参照ページ）をテクストとする。

『生物の世界』が書かれた時期は、日本の思想界では西田幾多郎や田辺元の哲学が大きな影響を与えていた。今西もこの書の執筆時には西田の『哲学論文集』を熟読しており、西田の特別講義のおりにはいつも最前席に陣取っていたと、彼と親しかった下村寅太郎は証言している（『今西錦司全集』月報第 1 号、1974 年）。その西田や田辺の思索が日本の戦争遂行に荷担していたと断定して、この側面から今西の理論を否定する論者もいる。1930 年代から 40 年代の日本思想はより大きな文脈で検討される必要があると私は考えるが、これについてはかつて『〈境界〉の制作——30 年代思想への接近』（『思想』第 882

号所収）という拙論で扱ったので、繰り返さない。

人間的主体と環境が相互作用を及ぼし合うものであることについては、この時期の西田が「場所の論理」形成の一環として活発な思索を展開している。

環境とは具体的には何であろうか。もちろん生物が食物を取り、またその生物を殺す敵がいるところであるが、それだけだろうか。それは「作られたもの」の側面だけに注目することになると今西はいう。「作られたもの」というのは、西田の哲学用語であり、この場合でいえば生物の対象的・静的な側面を意味する。むしろ、「作るもの」、つまり対象的世界の背後に働く生命の動的欲求を看取すること、働きとしての生命自身に語らせること--それが西田の、そして今西の抱負である。今西がいうには、生物は、「この世界に安住し、つねに平衡を保って静止していたいのかもしれぬ。食物をとらねばならないというのはなにかこの平衡が得られていないから、それを得ようとする努力であるともいえる」(54)。食の欲求は、世界との危うい平衡を希求するやり方の一つである。この捉え方には、ヘーゲルと同じく、食べることの根源に迫る意欲がうかがえる。さてしかし、食物をとったら、今度はその食物を消化しなければ平衡は得られず、消化しきってしまえば今度はその空隙を次の食物をとることで埋めねば……というふうに、生物は摂食と消化との間を終わりなく往復しなければならず、瞬間的・断続的にしか平衡は得られない。食を通して、生物が絶対の平衡に達するときは決して来ないのである。食を通して人は世界と和解することはできない--これは、前節の最後にも示唆したが、「食の限界」なのであろうか。

けれども、そのように言ってしまえば、唐突に生命の世界に人間的な意味をこじ入れることになるだろう。生物は、そして生物として生きているかぎりの人間も、生命とは何かという疑問を起こさないし、生きる目的をことさらに意識しない。生物にとっては「おそらくその日その日の生活が円滑に進められて行くのがまずなによりも緊要」(55)なのである。そのためには食物として外から取り入れる（同化する）べきものを見分け、仲間と敵との見境をつけることが必要である。「そう考えると生物にとって食物とは自己の体内に取りいれられたから食物なのではなくて、すでに環境に存在するうちから食物でなければならない」（同）。私がこちらにおり、たまたま食物があちらにあるのを発見するということではない。私が生活する「生活の場」としての環境は、私自身の「継続」であり、「延長」である（57）から、私が食物として認めたものは、私の身体の延長である。であれば、逆に、「その食物にはまたわれわれの生命の延長が感ぜられると考え」(58) てもいいのである。人間が食べることにこだわるのは当然といえる。

しかし、このように私と私の食べるものとは切り離せないものであり、「食物を認めるということはすなわち自分を認めていることになる」(61) とさえいえる反面で、私がそれをつねに「食物」として認めているかどうかは疑問である。私がそれを必要としていないとき、空腹でないとき、むしろ性欲を覚えているとき、それは私の目に「食物」とは映らない。つまり、生物があるものを食物と認めるか認めないかは、「その生物の要求

にしたがってそのときどきに一定していない、そしてその要求とはつまり生物における統合性が一定の指導方針にしたがって、そのときどきに求める処置」（同）であるということになる。

このようにして、今西は、食を「本能」という言葉で固定的に解釈することを拒絶する。生物が食べるということは、もっと主体的なものである。どんな原始的な生物でも、「統合性」をもち、「主体性」をもって食物などを認めている（64）。生物学からのこの今西の指摘は、人間があるときは食べ、またあるときは食べないという振る舞いをすることを解釈するのに役立つであろう。ひいては、食の援助の仕方にもヒントを与えてくれる。つまり、援助される側の「統合性」と「主体性」とを尊重しつつ、場合に応じて「食べさせ」たり、「食べない」ことを許容したりする柔軟性が大切だと思われるのである。それは援助の統合性と言い換えることができる。